

## Subversive Susan: 『カスターブリッジの市長』における母の物語

中和彩子

## 序

『カスターブリッジの市長の生涯——性格を持つ男の物語』は、ハーディが「ひとりの男の行為と性格の探究」を試みた初めての作品である<sup>1)</sup>。彼は、この成功を以て、複数の若い男女の織り成す恋愛模様を基調とするそれまでの作風からの訣別を告げると同時に、小説家としての低迷期を脱したという評価が一般的である<sup>2)</sup>。「複雑ではあるがかなり整合性があり有機的である」プロット<sup>3)</sup>は、すべての出来事が主人公ヘンチャードによって、あるいは彼をめぐって生じることによって可能になっている。この強力な求心性は、特定の人物や価値観をあからさまに支持することを避ける傾向のある作家<sup>4)</sup>の生み出したそれまでの主人公には与えられなかったものである。

しかし、ヘンチャード以外の人物が「彼から離れては生きることが許されていない」という印象を与えるまでに彼の影響下にあることは、この小説の弱点でもあるかもしれない<sup>5)</sup>。中でも主人公の妻スーザンは、小説のプロット——あるいはヘンチャードの性格悲劇のパターン——の上で重要な役割を果たすことになるものの、人物としては問題にならないほど影が薄く取るに足りない<sup>6)</sup>というのが、一般的な印象であろう。

ヘンチャードの性格の犠牲となって売られた妻という、冒頭からのイメージは、小説がヘンチャードの罪の償いの物語として進行することによって否応なく前景化される。逆の言い方をすれば、スーザンが無力な犠牲者であることは、ヘンチャードの性格悲劇の中心を成す、妻子売りとその償いという筋書きの前提となっているのである。そしてテキストは、筋の上ばかりでなく描写の上でも、ほぼ一貫してヘンチャードによる侮蔑的なスーザン像を支持し、補強している。

娘の将来を思い、過去の屈辱や恨みを抑えてヘンチャードのもとに戻ってくる「哀れな寛大な」スーザン(71; ch. 9)は、適切にも、「幽霊」「骨と皮ばかりの女」と陰口を叩かれるほどの虚弱な肉体をことさらに与えら

れる(89, 90; ch. 13)。そして彼女は、復縁後、ほとんど表舞台に出ることのないまま死の床につき、ひそかに望んでいた娘の結婚の可能性が夫によってつぶされたことに嘆息して「何事も望み通りにはならないものなのねえ」という言葉を残し(118; ch.18)、舞台裏で死ぬ。この言葉は、彼女の死後処理が遺志通りに行われなかったことにより裏打ちされ、無力と忍苦の具現としてのスーザン像はここに完全なものになるのである。

しかしその一方で、テキストが、このような一面的なスーザン像を時々裏切ってみせていることを見過ごすわけにはいかない。小説冒頭で、スーザンは子供を抱き、夫と無言で並んで歩く若い女として、無味乾燥に導入される。続いて、しかし、語り手は彼女の顔を印象主義的にクローズアップしているのである。

若い女の顔の最も大きな、そしてほとんど唯一の魅力は、その豊かですばやい変化にあった。娘を横目で見下ろす時、彼女は愛らしい顔をした。美しいといってもよいほどであった。なぜなら、そうした時に、顔のつくりが強烈な太陽の光線を斜めに受け、それがまぶたや小鼻を透き通らせ、唇を燃え立たせるからであった。黙って物思いにふけりながら生け垣の蔭をとぼとぼと歩いている時、彼女は硬い、半ば無気力な表情を浮かべていた。それは<時>と<偶然>の手にあっては、もしかしたら公正な扱い以外なら、何でも可能であると考えている者の表情であった。第一の相は<自然>のなせるわざ、第二のそれは恐らく文明のしわざであった。(28; ch. 1)

光の当たり具合と見る者の視点の変化によって見えてくるスーザンのこの二面性に、正確には第一の<自然>の相に、ヘンチャードは終生盲目なのであり、同じ場面を小説最後で回想する彼は、悔恨をこめてこうつぶやく。「あいつは悲しそうでくたびれていた」(273; ch. 44)。

テキストの示すスーザン像のずれという観点から問

題にすべきもうひとつの大事な箇所は、ヘンチャードが彼女の死後、そのあきれるまでの単純さと善良さについてニューソンともに語る場面である。「あいつが物事をありのままに見ていれば、俺のもとを去るようなことはなかつただろう。絶対に。でも、あいつにそんなことがわかるわけではない。あいつにどんな取り柄があったろう。ひとつもない。自分の名前は書けた。それだけだ」(252; ch. 41)。しかしこのように言うヘンチャードは既に、スーザンの書いた遺言書によってエリザベスの父親についての彼女の欺瞞を知り、打ちのめされていたはずである。このことは、他のより小さな矛盾とともに、ヘンチャードによるスーザン像の不適切さに読者の注意を喚起しているように思われる<sup>9)</sup>。

冒頭では、語り手によって二面性が観察されていたスーザンだが、ヘンチャードの妻子売りとそれに続く償いの物語の中で、その第二の相だけが反復的に語られ、前景化していく。テキストは、スーザンの二面性を隠しつつ露呈する。本稿では、その露呈の瞬間を手掛かりとしてスーザンの第一の相の行方を辿り、スーザンの物語が中心的物語とどのように絡んでいるかを明らかにすることによって、スーザンの役割の再定義を行うつもりである。それは、ひとりの男の性格悲劇の価値ある一義性を作り出すために、ハーディがどのように作為しなければならなかったのかを跡づける試みでもある。さらに、そのようにして新たに得られたスーザン像を、ハーディの繰返し用いてきた母のモチーフの変奏として捉えてみることによって、この小説の、ウェセックス小説全体の中での意味づけをし直してみたい。

## 1 妻子売りのエピソードにおけるスーザン

貧しい干草刈りとして登場するヘンチャードは、実は、自らを「有能で立派な男が悪い妻のせいで破滅」した例、「より詳しくは、軽率にも早く結婚したために…高邁な目的や希望が挫折し活動力が失われ」た「有為の青年」と捉え、苛立ちを覚えている(31; ch. 1)。そして、ラム酒の酔いにも助けられて大胆になった彼は、足手まといの妻子を家畜のように売り払ってしまう。

ヘンチャードの性格が、飲酒や偶然といった状況との絡み合いによって妻子売りを引き起こしたというのが、小説の示す論理である。しかし、それらの明示的な力以上にヘンチャードにとって外部であり決定的であるひとつの影響力を、テキストはその表面から隠し

つつ見せている。それがスーザンなのである。ヘンチャード自身は、翌朝になって、単純で従順なスーザンが自分の冗談を本気にとったために競売が遂行されてしまったとぼやいている。このぼやきは、スーザンの力の働き方の特徴を言い当ててはいるが、力そのものについて語ってはいない。しかし、競りの開始から終了に至るまでのプロセスを、ヘンチャードの大仰な暴君的身振りに惑わされることなく読むならば、スーザンが、その第一の相と第二の相の間を巧まずして行き来しつつ、ヘンチャードの物語を内部から切り崩し、最後には別の物語にしていることに気づかされるはずである。

ヘンチャードは過去にも酔って妻を売り飛ばすと言ったことが一度ならずあり、スーザンはその「冗談」あるいは「ナンセンス」に慣れきっているはずであった。しかし、自分の警告や必死の懇願にもかかわらず「冗談」を撤回しない今回のヘンチャードの執拗さを見てとった瞬間、スーザンはきっぱりと競りへの同意を公言するのである。「誰か買って下さればと思うわ。今の所有者はこの女の好みに全く合いませんから」(33; ch. 1)。登場以来、赤ん坊とのつぶやくような「会話」か、夫に対する聞き入れてもらえないささやき以外はほとんど沈黙していた彼女が、初めて、人前で効力ある言葉を発する。夫の侮辱を自暴自棄になって受け入れた彼女のこの一声が、彼によって蒸し返されては流れてしまっていた競りの開始<sup>10)</sup>を決定づけるのである。それまで妻を相手にしていなかったヘンチャードは、ここで即座に「お前だってそう [=自分の好みに合わない]さ。なら、俺たちはそのことで意見が一致したってわけだ」(33; ch. 1)と応じ、次いで、人々に対しても夫婦間の合意を強調してみせることで初めて、競りの実行を可能にする雰囲気を作られる。

大得意のヘンチャードは、実は、競りを実行に移すために妻の「同意」を必要とし利用したことになる。そのことは、不要な妻を駄馬のように売り飛ばすという本来の趣旨からの逸脱である。また、スーザンの発言は、夫の見るままに自分を商品へとおとしめた上で所有者の交代を昂然と要求するという巧まざる痛烈な皮肉を含んでいるのだが、傲然たるヘンチャードはこれに全く無頓着であり、自分の主導性が密かに骨抜きにされていることに気づかない。

この逆転は、思いがけなくも買い手が現れた時、再び表面化する。それまでのことの成り行きに関しては、見物人たちは、「陽気な皮肉が極端に走ったものである

と見ていた。そして、仕事がなく、そのために彼 [= ヘンチャード] は世間に、周りの人間に、身内に、痲癩を起こしているのだと思っていた」(34; ch. 1)。ところが、ヘンチャードの前に、男が実際に5ギニーを出した瞬間、「その場の愉快的な浮ついた雰囲気はふつりと絶えた。無気味な暗さがテントを満たし、そこにあるものすべての様相を変えてしまうように見えた」(34; ch. 1)。しかし、屈辱的な扱いを無言と無感覚を以て耐えてきたシーズン、いわばはじめから「浮ついた雰囲気」からひとり疎外されて「無気味な暗さ」に浸されていたシーズンは、逆説的に、誰よりもすばやくこの冗談と現実との境界の揺らぎに対処するのである。

「さあ」と、女は言った。静寂が破れ、その小さな乾いた声はかなり大きく聞こえた。「ことを進める前に私の言うことを聞いて。もしもあんたがその金に手を触れたら、私とこの子はその人について行く。いいわね。もうこれは冗談じゃないんだからね。」(34; ch. 1)

農村の犠牲者の忍耐と無力を体現しているだけであるかのようなシーズン<sup>9)</sup>が、ここで、夫婦間の「合意」事項を再確認し、夫に最終的な決断を迫っている。人々がことを冗談の領域に押し戻せるようになるのに先んじ、彼女の言葉が呪術的な響きさえもって、ことを真剣の領域へと一押しする。妻のこの念押しに腹を立てたヘンチャードは、金を取り、脅かされた自分の主導性を再び誇示するかのようになり、後悔の色も見せずに取り引きの成立を宣言するのである。

この取り引きにおいて、シーズンが、商品におとしめられながらも二人の男を品定めすることを許されていることは重要である。「彼女の気持ちを傷つけない」買い手は、ヘンチャードに金を取らせる前に、ヘンチャードの「あいつも同意している」という言葉が誓って本当であるか、シーズンに確認をとる<sup>10)</sup>。シーズンは、「夫の顔を一瞥し、そこに後悔の色がないのを見て取ると、『誓います』と言」い、次いで、新しい所有者に対しては「ちょっと立ち止まり、注意深い一瞥をくれた」後、目を伏せて付き従うのである(35; ch. 1)。こうしたシーズンの判断力の発揮の瞬間は、ヘンチャードの筋書きを内部から突き崩す。それでも、ヘンチャードが「けりをつけたという風をして」金をポケットにしまいこむ時(35; ch. 1)にはまだ、彼による妻子売りという体裁は守られている。しかし、その直後に、スー

ザンがヘンチャードのつけた結末にいわば書き加えをしてしまう。男に付いて黙って出口まで来た彼女は、振り返って結婚指輪を抜くと、ヘンチャードの顔めがけて投げつけ、捨てぜりふを吐くのである。

「二年間あんたと暮らして、くれたものは痲癩だけ。もうあんたとは何の関係もないんだから、私はどこかよそで運を試してみるわ。私にもエリザベス=ジェインにも、どっちにとってもそのほうがいい。じゃあさよなら！」(35; ch. 1)

この宣言は、本来なら、妻子という軛から首尾よく逃れたヘンチャードによってなされるはずのものである。皮肉にも、ヘンチャードは、自分が最初にもらしていた愛想づかしと野心の表明を自分で繰り返す代わりに、妻に彼女自身の声で投げ返されているのである。「この結末を全く予期していなかったよう」に茫然自失した夫を残して、シーズンは消える(35; ch. 1)。見物人も多かれ少なかれ意外さと後味の悪さとに打たれているが、幾人かはヘンチャードを笑い、また、シーズンはよりよい所有者を見つけてよかったという感想を述べる者もある。妻を厄介払いしたい若者、そして彼の鬱屈を暗黙のうちに理解し許容する見物人たちが共犯者となって始めた、本物の体裁を備えた競りの真似事。それを、シーズンが、本物にすり変えてしまうのである。男が妻子を家畜のように売り払うという物語は、結末を迎えるまでに、その内部に胚胎した、妻子が不甲斐ない夫を捨てる物語にとってかわられている。

以上のように、ヘンチャードの翌朝の反省をはじめとして、小説を通じて反復される、無力で忍耐強い妻の虐待としての妻子売りという図式は、シーズンが隠れた二面性をもつことによって実は最初から破綻している。

## 2 復縁のエピソードにおけるシーズン

ヘンチャードとシーズンの復縁のエピソードは、彼の側の贖罪と自己処罰の物語として提示される。彼が、シーズンとその娘を自分の広い屋敷に引き取った時、「控え目な」ふたりの存在は、「家の中身が増えたという感じをほとんど与えなかった」(92; ch. 14)。しかし、これほどまでに取るに足りない所有物の立場に再び甘んじ、ヘンチャードの筋書きの中に取り込まれたシーズンは、それを内部から巧まずして切り崩すのである。その破

壊力の根本には、ヘンチャードにとっては妻子売りの逆回しである復縁が、スーザンにとっては、むしろ回復であるというずれがある。

ヘンチャードの妻子売りは、利己的な動機から権力を濫用し、家長としての自分から逃げ出す物語でもあった。18年後、既にカスターブリッジの市長や教区委員を務め、経済界の頂点に立つ大商人でもあったヘンチャードにとって、再び夫あるいは父に復位することは、妻子を売った時点で極小化した彼の家父長的な権力の極大化をも意味していたはずである。つまり、ヘンチャードが行っていることは、感情的のみならず論理的にも、妻子売りの物語の完全な逆回しの試みなのである。それに対して、スーザンは売られた時と全く同じ論理で動いている。ニューソンという二番目の「所有者」を失って生活に困ったスーザンは、ヘンチャードを次の適当な所有者と見て彼のもとに戻るに過ぎない。しかも、彼女の死後明らかになるように、ニューソンの「遭難死」は、売買に法的効力などなかったことを偶然知ったスーザンに愛想づかしされた彼の、「もしも自分が死んだと思えば彼女は彼 [=ヘンチャード] のもとに戻るだろう」と考えた上での工作であった (252-53; ch. 41)。つまりここでも、現在の所有者が不相当であることを宣言するスーザンが、夫婦の離別を引き起こしていたのである。

第3章に始まる小説の主部が、ヘンチャードによってではなく、彼を捜して娘とともに旅をしてきたスーザンによって開始されるところに、彼女の密かな優位は、既に暗示されているといえるかもしれない。ヘンチャードの妻子買い戻し/贖罪 (redemption) 物語が実際に動き出すのは、彼が、スーザンの手紙への返事に5ギニーを添えてエリザベスに手渡した瞬間からである。しかし、彼が始まりと思っているその時点で、ヘンチャードはスーザンによって既に始められたことの半ばに投げ込まれているに過ぎないのである。さらに遡るならば、ヘンチャードは、やもめとしてカスターブリッジで生活し始める前に、妻子探索の旅に数ヶ月を空しく費やしていた。つまり、妻子売りの時と同様、またしてもヘンチャードの始め損なった物語に、スーザンが始まりを与えていることになるのである。

スーザンは、夫を捜し当てて再会にこぎつけるまでに、彼の現在の境遇と人柄を観察し、判断する時間が十分にあった。その結果、自分たち母子に親切を施してくれる可能性があると感じたスーザンが、最終的に名乗り出る決心をするのは、ヘンチャードの富を象徴

する大きな干草の荷馬車の列を目にした時である。かつてニューソンを選んだスーザンの値踏みの視線が、ここに反復されている。

ヘンチャードとスーザンの再会以降は、ヘンチャードがすべての主導権を握る。冒頭で所有者交代を要求するスーザンの声に屈従しか読み取れなかったヘンチャードは、ここでもやはり、卑下や口ごもりや沈黙の裏にスーザンが独自の物語を持っていることに気づかない。しかし、読者には明らかなように、彼が支配者の鷹揚さを以て一方的に切り出す家族再編計画は、すべてスーザンの所期の目的に適っている。

二人の物語のずれは、復縁の唯一の共通目的であったエリザベスをめぐってテキストの表面に現れる。スーザンにとっては、「再婚」してヘンチャードの家に正式に迎え入れられ、娘の生活と将来が保証されたことで、当初の目的は果たされている。しかし、ヘンチャードにとってはさらに、感情的にも論理的にも、継子のエリザベスを実子に復位させなくては筋書きが完成しないからである。スーザンは、エリザベスを改姓させたいというヘンチャードの強い希望に表面上は同意しながら、エリザベスに向かっては、亡きニューソンへの忠義をほのめかす。その暗躍の結果、エリザベスは改姓を婉曲に拒否する。

このように一度挫折したヘンチャードの物語は、スーザンの死を契機に完成が可能になるように見える。彼は、実の父の名乗りをあげてエリザベスに自分の姓を付けることを承知させ、「エリザベスはとうとう自分のものになった」という満足に浸る (122; ch. 19)。しかし、本当の結末はその直後に来るのである。スーザンの遺言書を見つけたヘンチャードは、「エリザベス=ジェインの結婚当日まで開封しないこと」という表書にもかかわらず、妻に対する日頃からの軽視からためらいもなく読んでしまい、その結果、今のエリザベスが競売で失った我が子ではないことを知るのである。翌朝、気持ちの整理がついてヘンチャードを実の父と慕い始めたエリザベスの頬に、彼はくちづけをする。

この瞬間とこの行為とを、彼は何週間も前から思い描いては胸ときめかせていた。それなのにいざ実現してみると、惨めで味気ないものにほかならなかった。彼が娘の母親との関係を回復したのも、主として娘のためだった。が、すべての計画の結末は、こんなちりと灰なのであった。(124; ch. 19)

妻子売りの時と同様、ヘンチャードに不当にないがしろにされたスーザンが、ヘンチャードのつけたはずの物語の結末を無効にしてしまっている。ヘンチャードは、スーザンの告白を秘密にし、エリザベスを実の娘として通すことにより、スーザンのつけた結末を取り消して自分の物語の体裁を守ろうとする。しかし、この試みも、かつて彼がスーザンのつけた妻子売り物語の結末を、捜索の旅によって無効にしようとした試み同様、失敗に終わることになる。

スーザンの物語の逆転の優位という観点からもうひとつ注目すべきは、遺言書の締めくくりの文句である。「できたら許して下さい、かつてあなたがひどく不当に扱った女を。その女があなたを許しているように」(122; ch. 19)。これは一見、二人の再会劇の糊上げされた結末となっている。ヘンチャードは、償いの意志と計画を話したあと、彼女からの許しの言葉を引き出して再会劇の幕を閉じようとするのだが、スーザンは口ごもるばかりで、彼は「今後の俺のすることで俺を判断してくれ」と引き下がるほかなかった(83; ch. 12)。スーザンの遺言書は、ヘンチャードの求めていた許しを与えていることになる。しかしそれは、ヘンチャードの仕打ちに対しての心からの許しであるよりは、彼女自身がヘンチャードを欺いてエリザベスの実父と信じこませていたことに対する許しを乞うための代価であり、表面上はヘンチャードの贖罪物語を適切に締めくくりながら、実はその終わりを永遠に引き延ばすのである。ヘンチャードが最後まで妻に対する罪の意識に囚われ続けるのは、内容的観点からのみならず、形式的にも適切であるといえよう。

以上の読み直し作業から、スーザンがヘンチャードの犠牲になりながらも、その<自然>の相によってしたたかに生き抜く様が、ヘンチャードの悲劇を主眼とするこの小説の中に埋もれていることが見えてくる。別の言い方をすれば、この小説を支配するのはヘンチャードの物語であるが、実はスーザンの独自の物語がそれとひそかに拮抗する形で進行し、支配的物語の意味と価値を虚仮にさえしているのである。「あいつには、望むなら娘を連れて自分の道を行かせてやる。俺は俺の道具を持って、俺の道を行く。聖書の話みてえに簡単なことだ」というヘンチャードの利己的な妻子売りの筋書き(33; ch. 1)も、彼が「ことは自然で簡単だから、思っただけで半分できたも同然だ」と鷹揚に保証する家族再編の筋書き(82; ch. 11)も、同じように転覆をみる。スーザンが捨てぜりふを吐いて買い手ととも

に立ち去る痛快な瞬間、エリザベスの実父がスーザンの遺言書によって判明する滑稽でさえある瞬間、それら転覆の瞬間がヘンチャードの悲劇の構成要素となり得るのは、ヘンチャードの責任や運命の中にそれらを回収していくテキストの働きのみによる。

### 3 母としてのスーザン

中心的な物語を転覆させるスーザンという観点から小説の読み直しを図ってきたが、次に、スーザンの機能からさらに、その人物造形に踏み込むことによって、ヘンチャードの物語の転覆の意味を考え、読み直し作業を締めくくりたい。

スーザンは何よりもまず子供と密接に結びついた母として存在している。小説の冒頭で、匿名の若い男と子供を抱いた女を風景の中に導入した語り手は、彼らの際立つ特徴として、完全な沈黙を保っていることを挙げる(27; ch. 1)。その沈黙は、夫のヘンチャードの回想によれば、「忌々しい自尊心と貧しさに対する屈辱感」から妻を無視していた結果である(273; ch. 44)。しかし実は、この妻は、バラッドシートを読みながら歩いている夫ほど無言でもひとりでもないのである。なぜなら、「抱いている子供を別にすれば、ひとりで街道を歩いているも同然」の彼女は、時々子供にささやきかけ、子供もそれに「応えて(in reply)」何やらぶつぶつぶやくという交流が成立しているからである(28; ch. 1)。無視する夫の図像は、疎外される父のそれへと容易に反転する。かゆ売りのテントにおいても、スーザンは、酔ったヘンチャードの結婚を悔いる発言を「聞かないふりをし、寝たり目覚めたりの子供に向かって、ごく些細なことをぼつりぼつりと内緒話」する(31; ch. 1)。

このような母子の絆、あるいは同盟は、一家の休憩所の選択にも影響を与えている。スーザンは、二つ並んだテントのうち、酒を合法的に売る方に夫の心が傾いているのを察知して制する。「だめだめ、あっち。私はいつだっておかゆがいい。エリザベス=ジェインだってそう。それにあなたもそうでしょうよ。長い一日の疲れの後では身体にいい食べ物よ」(30; ch. 1)。スーザンがヘンチャードに正面きって逆らうのは、これが最初で最後であり、また、ヘンチャードが文句を言いながらもすぐに妻の言葉に従うのも、この時限りである。明示されてはいないが、ヘンチャードが、妻よりは子供のことを考えてそうせざるを得なかったことは想像に難くない。

そして、子供と一緒にという条件で売られることを承知したスーザンは、「右手で水夫の腕をつかみ、左手に小さな娘をのせ、激しくすすり泣きながら」テントを出る(35; ch. 1)。屈辱の涙を流しながらも新しい所有者をしっかりと捉えたスーザンの右手は、彼女の無力と依存を表現しつつ、同時に、強い母性に釣り合う強い生活力、生命力を暗示しているかのようである。冒頭で、スーザンの<自然>の相が「[抱いている]娘を横目で見下ろす時」の顔に現れていたことは(28; ch. 1)、ここで重要な象徴性を帯びてくる。

妻子を見限る夫という図像の下に既に見え隠れしていた、母子に見限られた父の図像は、ややあって我に返ったヘンチャードが、「俺はあいつの後など追わない…あいつには娘を連れて行く権利などなかったんだ。あれは俺の娘だ」と空しい宣言をする時(36; ch. 1)、一層鮮明になる。

中年のスーザンも、何よりエリザベス=ジェインの母として存在し、去る。再導入されるスーザン母子は、18年前辿ったのと同じ道を、「手をつないで歩いていた。そして、これは純粹な愛情から出た行為であることは見てとれたであろう」と語られる(40; ch. 3)。また、かつてヘンチャードの存在が母子にとって無に等しかったのと同様、今の二人の「夫」であり父であるニューソンは、「溺死したのかどうかはわからないが、恐らくもう二人の前から消えてしまって」いる(45; ch. 4)。父親が誰であろうと関係なく成立している母子の絆、スーザンの母としての存在の確かさが、ここに浮かび上がってくるのである。

スーザンの母性と結びついた特徴の最も重要なものは、自己犠牲である。エリザベスは旅の途中、急速に健康の衰えを見せている母が、「娘さえいなければ完全に倦み疲れつつある人生をおしまいにしてもそう悲しいとは思われないということを示すような、諦めの口調で」話すのをしばしば聞く(46; ch. 4)。娘の将来の懸念だけが、自尊心や恨みを抑圧する苦痛を凌いで、スーザンをヘンチャードのもとへと前進させる。復縁を果たしたスーザンは、次いで、有為の青年ファーレーと娘との結婚を願って幼稚な策を講じさえし<sup>(14)</sup>、やがて二人がヘンチャードによって引き裂かれてしまったことが、彼女の死の床での気掛かりとなる。また、死後の処理について自ら冷静に指示する中で、「私が運び出されたらすぐに窓を開け、エリザベスのためにできる限り明るくしてやってください」と言ったという話は、人々に伝わり感銘を与える(118; ch. 18)。

しかし、スーザンの自己犠牲は、母子の確実な一体性ゆえに自己保存に通じている。ヘンチャードとの結婚生活そのものには何の喜びも感じられないにしても、「ヘンチャード夫人の人生の小春日和は、彼女が夫の大きな家と、恥ずかしからぬ人々の輪の中に入った時から始まった。そして、それはそうした小春日和にあり得る程度に晴れやかなものだった」(92; ch. 14)。献身的な弱々しい母の外観を持ちながら、ひそかな打算と策略で生活の安定を手に入れるスーザンにとって、娘はヘンチャードとの復縁の目的であると同時に手段であったと見ることさえ可能である。スーザンは、夫と娘の両方を別々に欺くことによって、結果的に自分のよりよく生きる道を確保している。スーザンが「あまり乗り気ではないながら、渋る気持ちを抑えて」、娘をヘンチャードのもとに遣わす時、過去の事実を何一つ知らされていない娘にとっては、「自分の立場は金持ちの親類を捜し当てるよう命じられた貧しい親類のそれにすぎなかった」(71; ch. 9)。たとえば「貧しい親戚の役回り」を屈辱と感じる娘を強引に口説いて「大金持のダーバーヴィル夫人」のもとに送り込むテスの母親<sup>(15)</sup>と違い、スーザンが利己主義の印象を与えないのは、ひとえに彼女が娘と一体的な母として造形されていることにかかっている。

このような葛藤なき母子関係の外に、ヘンチャードは半ば強制的に置かれてしまう。ヘンチャードは、エリザベスに物質的援助をする継父として誇大的な権力を振るうことを許される。その一方で、スーザンの母たることの確実さによって、ヘンチャードの権力の基盤の虚構性と脆弱さが暴かれてしまうのである。エリザベスに、何でもお前のいいようにしろと父親の鷹揚さを示しながら、「というよりは、お前の母親の助言通りに、か」(94; ch. 14)と付け加えてしまうヘンチャードは、いみじくも自分の立場の不安定さを表現している。

ヘンチャードの疎外状況をさらに強化するのは、スーザンが死んでも彼女の身体と精神を引くエリザベスが残るという、母娘連続の感覚である。「一目見ただけで」スーザンの娘とわかるエリザベスには、母の「かつての春のような特質が<時>によって巧みに移されて」いる(40; ch. 3)。また、ファーレーと結婚したルセッタが、エリザベスに今まで通り同居してくれるよう頼んだ時、「スーザン・ヘンチャードの娘が即座に決心したことは、その家にはもう住まいということだった」(194; ch. 30)。唐突に飛び込んでくる亡きスーザンの名は、社会通念上従わざるを得ない支配者による仕打ちが我

慢の限界を超えた瞬間その支配者に見切りをつける、という行動パターンが、母と娘に共有されていることを示すものであろう。このような母子の連続性に対し、「エリザベス=ジェインは自分のものではなく、自分は子の無い男である」と知ったことにひどい失望を味わってからは、ヘンチャードの感情には穴が開いたままになり(140; ch. 22)、それはついに埋まることなく、彼の孤独な死へとつながっていく。

ヘンチャードが、虐待であれ保護であれ常に極端な形で発動してしまう家長権力を、スーザンが母たることの確実さによって骨抜きにする。そのスーザンを、「単純」「哀れ」などと形容し、また、ヘンチャードの罪の記号として表象することによって初めて、テキストはヘンチャードの孤独を疎外であるよりは孤高として示し、彼を悲劇の主人公として、物語世界の威厳ある中心として機能させることができるのである。

### 結び

『カスターブリッジの市長』がハーディの小説家としての自他ともに認める転換点となったことは既に述べた。この転換点は、実は、ハーディが長年のいわば放浪生活を終わらせて帰郷し、しかも生家近くに自宅新築の準備を進めている時期にあっている。作家の帰郷と創作の間に、精神的物理的に深い関係があることは、マイケル・ミルゲイトの評伝などで跡づけられている<sup>14)</sup>。が、それらの明らかにされている伝記的事実の中で、とりわけ本稿での作品の読みの視点から興味深いのは、創作過程に母の影が感じられることである。

まず、ハーディにとり、生家は終生「母の家」として意識されていた<sup>15)</sup>。また、彼は、帰郷して約9ヶ月後から、週刊地方紙『ドーセット・カウンティ・クロニクル』の綴じ込みの1820年代後半のものを順々に読みすすめ、そこから興味深い事件や風俗を『カスターブリッジの市長』に取り入れている<sup>16)</sup>。が、選ばれたその時代は、ロバート・ギッティングズの指摘によれば、彼の母親の少女時代にあっており、彼女の昔語りの多くはこの時期に由来していた<sup>17)</sup>。この小説は、従って、作家が「コテッジの炉辺で[母から]聞いた話が、ドーチェスターで読んだ物によって補われ」て<sup>18)</sup>誕生したとも言え、母の記憶と史実、ハーディの想像力の化合物という側面を極めて強く持っているのである。

ハーディは以前にも、第一義的に母親として存在する女性を、長編小説の中で二度登場させている。最初

は『青い眼 (*A Pair of Blue Eyes*)』(1873年)のステューヴンの母マライア・スミス、そして有名な、『帰郷 (*The Return of the Native*)』(1878年)のクリムの母ヨーブライト夫人である。この二人の母は、ハーディの意図がどうであれ、いずれも彼自身の母を思わせ<sup>19)</sup>、ひとつの系列をなしている。

ステューヴンの母は、豪胆で強い上昇志向を持ち、自慢の息子がふさわしくない女性エルフライドに恋していることに気づくと、彼を深入りさせまいと懸命になる。ステューヴンは母の懸念を理解できず、母子は対立するが、互いに対する思いやりの強さのために対立は深刻化することはなく、結局はエルフライドの変心により糊上げになる。

この母子の間の控え目な軋轢は、ヨーブライト夫人とクリムにおいてはより深刻なものとなり、物語の中心を占めるようになる。クリムには、母の氣に染まぬ妻を迎えた作家自身の幻滅や後悔、罪悪感が投影されているという、しばしば行われる解釈は、外れたものではないだろう。同時に、しかし、二人の間の愛情もより詳細に描かれる。二人は「絶対に壊れない形の」深い愛で結ばれ、「息子は母の一部である」<sup>20)</sup>。

そして、『カスターブリッジの市長』においてハーディは初めて、子供を女性にし、葛藤なき母子関係を描くのである。スーザンの死は直接には描かれず、彼女をみとった看護婦から話を聞いた女により、唐突ともいえるほどの深い同情をこめて伝えられる。「…あの人は大理石みたいに白かったって。…それにあんなに思慮深い女性だったからねえ、ああ、かわいそうに、気を配らなきゃならないことはどんなちっちゃなことでももらさなかったんだよ」(118; ch. 19)。ハーディはここであたかもひとつの荷を下ろしたかのようなのである。これ以降、ハーディの小説で第一義的に母であるような女性は永遠に登場しないのである。しかし、この小説を書き上げた2ヶ月後、実生活の上では「母の家」の近くでの生活が始まる。ミルゲイトの伝えるように、ハーディの妻エマと実家——実質的には母——との折り合いの悪さが、ドーチェスターへの定住によって更に決定的なものとなり、一族皆をいさかいに巻き込むことになったのだ<sup>21)</sup>とすれば、スーザンの大理石のような荘厳で冷たい遺体は、作家がテーマとしてきた母子関係の理想状態での永遠の凍結を象徴すると同時に、そのような理想からの作家の訣別を暗示しているのかもしれない。

## 註

- (1) Thomas Hardy, preface, *The Life and Death of the Mayor of Casterbridge: A Story of a Man of Character*, by Hardy (1886; London: Macmillan, 1974) 25. 以下、この作品からの引用はすべてこの版に拠り、本文中に頁数と章数を記す。
- (2) たとえば Michael Millgate, *Thomas Hardy: His Career as a Novelist* (1971; London: Macmillan, 1994) 221; Robert Gittings, *The Older Hardy* (London: Heinemann, 1978) 40. 参照。
- (3) Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy 1840-1928* (1962; London: Macmillan, 1972) 179.
- (4) Harold Orel, ed., *Thomas Hardy's Personal Writings* (1966; London: Macmillan, 1990) 115-16; Millgate, *Career* 174-82. 参照。
- (5) Ian Gregor, *The Great Web: The Form of Hardy's Major Fiction* (London: Faber, 1974) 115.
- (6) このような評言の代表的な一例は、J. I. M. Stewart, *Thomas Hardy: A Critical Biography* (London: Longman, 1971) 114. しかし、スーザンが印象どおりの人物ではない可能性について、何らかの形で触れている批評も若干ながら見られ、本稿のアイデアはそれらに源を発している。R. B. Heilman, 'Introduction' to *The Mayor of Casterbridge* (Riverside Edition, 1962), qtd. in Gregor 116; Dale Kramer, 'Introduction' to *The Mayor of Casterbridge* (Oxford: Oxford UP, 1987) xix-xx.
- (7) J. I. M. Stewartは、この矛盾を、ハーディがスーザンの人物造形に無頓着であったことを示すものと解釈している (*Thomas Hardy* 114)。それに対して Dale Kramerは、テキストについての註の中で、小説の主要な版の比較からハーディの改訂作業をあとづけ、矛盾は必要悪であったと推測している。ハーディは「プロットのある時点で無学の依存的な女性を必要とし、別の時点では死んだスーザンから意外な事実が明かされることが必要であったのだが、この二つに折り合いをつけることがどうしてもできないということ認めざるを得なかったのだ」 (*The Mayor of Casterbridge* 125n, 295n)。
- (8) ヘンチャードは、スーザンが態度を急変させるまでに4回、妻を売ると宣言しているが、相手にされていない。
- (9) Douglas Brown, *Thomas Hardy: The Mayor of Casterbridge* (London: Edward Arnold, 1962) 9. 参照。
- (10) この買い手(ニューソン)は、「5分ほど前に入ってきた」ため、競りの発端や途中経過を見ていない (36; ch. 1)。
- (11) スーザンがエリザベスとファーフレアのそれぞれに送った匿名の手紙によって、二人は初めて二人きりで会う機会を得る (97-99; ch. 14)。
- (12) Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (London: Macmillan, 1974) 53-55; ch. 5.
- (13) Millgate, *Career* 197-205, 236-243; Michael Millgate, *Thomas Hardy: A Biography* (Oxford: Oxford UP, 1982) 247-55; Gittings 41. 参照。
- (14) Millgate, *Biography* 20.
- (15) Millgate, *Career* 237.
- (16) Gittings 41.
- (17) Gittings 41.
- (18) ヨーブライト夫人のモデルが母ジマイマであることは、ハーディ自身が認めている (Millgate, *Biography* 21)。しかし、極めて自伝的要素の強い『青い眼』において、スティーヴンこそ作家自身の投影であるように見えるのにもかかわらず、ハーディは自分に近いのはヘンリー・ナイトであると記述している (Florence Emily Hardy 73-74)。
- (19) Thomas Hardy, *The Return of the Native* (1878; London: Macmillan, 1974) 184; bk. 3, ch. 3.
- (20) Millgate, *Biography* 270.